

青年部が日本農業新聞会長賞を受賞 長年の食農教育活動が評価

当JA青年部が1月、JA全中主催の「バケツ稲づくりコンテスト」支援団体の部で、日本農業新聞会長賞を受賞しました。同コンテストはバケツ稲栽培や研究のまとめを通じ、子どもたちに米や農業への理解を深めてもらうことを目的に開催され、今回の受賞は当JA青年部が小学生を対象に20年以上続けている食農教育活動が評価されたものです。

教材用の水稲苗の発送、小学校訪問による児童との交流活動、庄内の自然の豊かさや農業の魅力を伝える田舎まるかじりツアーなど、食と農の距離を近づけるために、青年部が行っている食農教育活動をご紹介します。



毎年5月、社会科で米作りを学ぶ小学5年生に体験学習用の水稲苗を発送しています。バケツ稲栽培を通して農業や食育への関心を持ってもらうことが狙いで、昨年は「はえぬき」の苗をガイドブックや肥料とともに60校（神奈川県42校、東京都18校）へ送りました。発送している小学校は年々増加しています。

「上京運動」と呼ばれる小学校訪問活動は、24年前から続いています。昨年は6月3～4日、25人が東京都内と神奈川県横浜市内の24校を訪問し、米作りの先生として出前授業を行いました。「米の品種で味が違うのですか?」「おいしい米を作る工夫は?」といった質問に答えたり、バケツ稲や学校田を見て栽培のアドバイスをしています。



小学生に田舎体験をしてもらう「田舎まるかじりツアー2010」。昨年は7月30日～8月1日に行われました。東京都と神奈川県の5つの小学校から43人が参加し、酒田市の山居倉庫や庄内米歴史資料館、カントリーエレベーターを見学したり、田んぼでの泥んこバレーや収穫体験、農家への民泊など、庄内の農と自然を満喫しました。

10月には、5月に苗を送った小学校から特に生育の良い稲を送ってもらい「バケツ稲コンテスト」を開催。収穫量調査をし、上位校を部員が訪問、賞状を手渡しています。昨年は猛暑などの影響で収穫できなかった学校もありましたが、青年部では「今年はずっと細かな指導を行い、ぜひ収穫の喜びを味わってほしい」としています。



こうした一連の青年部の活動に、子どもたちからお礼の手紙が続々と届いています。「自分たちでお米を作ってみて初めて農家の大変さがわかった」「いつもおいしいお米を作ってくれてありがとう」「家でよそったご飯は残さず食べています」。またバケツ稲や学校田での収穫の様子や、手書きの観察グラフなども送られてきています。



伊原 吉仁さん
(昭和61～62年度
JA酒田青年部委員長)

Q. 小学校訪問を始めたきっかけは?
A. 合併前のJA酒田青年部・農政部会の2～3人で、横浜市内の小学校を訪問したのが最初ですね。「上京運動」とは、もともと米価要求の活動だったので、当時はそういった農政運動に行き詰まりを感じていました。そんな中で長期的視野に立ち農業理解を広めよう

こととあります。続けることは大変だと思いますが、実際に農業に触れてもらえるチャンスですから、これからも頑張ってくださいね。

Q. 青年部へメールを。
A. 国や教科書ではできないこともありますが、続けることは大変だと思いますが、実際に農業に触れてもらえるチャンスですから、これからも頑張ってくださいね。



水落 亘さん
(当JA青年部委員長)

Q. 受賞の感想をお願いします。
A. 今回受賞は歴代委員長をはじめ、先輩盟友の皆さんのおかげです。大変光栄で、続けてきて良かったと思っています。
Q. 食農教育活動を続ける意義とは?
A. 多くの盟友がいる中で一つの目的に向かうことは簡単ではありませんが、経営の違いや支部を超えて交流を持てますし、今後も青年部の柱となる活動として重要になると思います。また食育はすぐに結果が現れるものではありません。10年、20年後、今の子どもたちが大人になったときに成果が見えてくるのだと思います。長期的な視野があつてこそ食育活動ですね。

Q. 小学校訪問を始めたきっかけは?
A. うと始めたのが、小学校訪問でした。農業用語をどうわかりやすく説明するか悩んだり、子どもたちの素直な質問を新鮮に感じたり、それに答えるのも楽しかったですね。自分たちがヒーローになったよううれしく思ったのを覚えています。